

抜粋版

振興会ニュース

第 10 号

1999年4月

日本バスケットボール振興会

目 次

- 平成10年度 秋季理事会の概要 1
— 今後の方針決定と活発な意見交換 —
- 平成10年度 秋季役員会の概要 5
— 組織と活動の充実に向かって —
- 平成11年 春季理事会の概要 9
— 平成11年度は組織強化と専門別懇談会の充実 —
- 日本バスケットボール振興会について 14
- 女子アジア大会優勝の記 (団長 安達 宣郎) 16
- 新しい会員から一言 20
加藤 雅春 早川 忠雄 榊原みどり
- 平成11年度 行事日程 23
(日本協会・日本実連・日本学連 他)
- 計 報 25
故 加藤 祥行 成瀬 璋
- 事務局だより 25

『日本バスケットボール振興会について』（対外案内用）

今日私どもの「振興会」の源泉は、1978年（昭和53年）に設立された「日本実業団バスケットボール連盟協力会」にあります。爾来20年におよぶ歳月の波に洗われながら脱皮を重ねてきた現在の当会の姿を思うとき、歴代関係者の継続的なご努力の結実として、誠に感慨深いものがあります。

そうした思いの中で、このほど、今日の「振興会」に至る道程を顧みながら、内容を極く簡単に圧縮した一文を草してみました。お互いに回顧かたがた将来を展望するうえでの、一つの“よすが”としてご参考頂ければ幸いに存じます。

なお、この文書は今後、外部の方々に対する当会の案内、PR用にも活用できるよう、別途パンフレットとして作成致しますのでご利用ください。

（編集・広報懇談会）

日本のバスケットボール界を支えている幾つかの組織団体の何れかに所属され、長年に亘り当該組織の関係者の一員として、組織運営やチーム活動に携わってこられた方々は大勢おられます。

そのうちの一部有志者が、一般の熱烈な継続的ファン及びバスケットボールとご縁の深い企業体各位と共に、現在「振興会」を組織し、

★将来に亘り相互の懇親・交流を図ること。

★日本のバスケットボール界の現状や将来の展望に思いを致しつつ、お互いの経験と知恵を結集し、斯界発展のため物心両面から努力を尽くすこと。

を目標に活動しております。

以下簡単に、現在に至る推移を顧みるとともに現況につきご案内致します。

【今日までの歩み】

- (1) 歴史的な流れとしましては、“実業団バスケット”に関係していた個人（OB）及び企業（法人）が、相互の親睦を図りながら「日本実業団バスケットボール連盟（以下日本実連）」を全面的に応援すべく、1978年（昭和53年）5月に設立した「日本実業団バスケットボール連盟協力会」の発足に遡ります。同会はその後10年に亘り、日本実連への資金援助、ファン層の拡大、懇親行事の開催等、諸事業を展開しました。
- (2) 1988年（昭和63年）に至り、当時日本実連の運営上の柱となっていた“日本リーグの主管”という業務が諸般の事情から（勸）日本バスケットボール協会に移管されるに及んで、協力会としては、それまでの路線を更に拡張、実業団バスケット全般の普及発展に資することを方針とし、会名を「実業団バスケットボール協力会」と改めました。
- (3) 更に、1992年（平成4年）4月、より広い視野に立って、協力会事業の一つに、“日本バスケットボール発展への提言”を加えたことから、「日本実業団バスケットボール協力会」という呼称のもと、オリンピックに向けての公開座談会を開催するなど、新たな流れを導入致しました。

【世界の流れの中で】

さて、その後の世界の動向を眺めますに、本場アメリカでは、NBAがオリンピック優勝以来益々脚光を浴び、その国際的地歩を固めて世界戦略に進出する一方、ヨーロッパ各国では、クラブ組織を基本としたプロ化が展開され、アジアでもまた一部の国々がプロ化を実現するなど、それぞれに発展的変貌を見せました。

日本におきましても、日本代表チームの、アトランタ五輪や福岡ユニバでの活躍、最近の世界選手権参加など、一応の成果はみられるものの、“シドニー五輪への道”はなおかなり厳しいことと思われます。NBA旋風は、日本国内に多面的な好影響をもたらし、若年層ファンを中心とする人気はむしろ追い風ムードに在るなか、トップを行く日本リーグ(JBL)も、その30年の歴史をふまえて積極的な脱皮を図り、運営方針の改革、体質の活性化を志向しております。

昨今は、経済環境の厳しさもあって、何かにつけ非常に難しい状況を迎えてはおりますが、日本のバスケット界としては、男女とも当面の五輪出場を実現して国際的立場を向上させ、世界のトップレベルの技術を習得していく、といった大きな課題を抱えながら、プロ化問題への対応、底辺層の開発強化、地域振興への貢献、組織力の改善等々、多くの現実的課題への対処を迫られており、その前途は正に楽観を許しません。

国内バスケット界の頂点に立つ日本バスケットボール協会のもと、傘下各団体の大同団結が期待される所以であります。

【振興会の発足と現状】

- (1) こうした最近の状況を背景に、振興会としましては、従来迄の“実業団バスケット”の範疇を越えた高い次元に立って“日本のバスケット”のため寄与すると共に、世界のバスケットの流れに乗り遅れることのないようアピールを続けたい、との思いから、更に広く各分野に呼びかけ、衆知を集めて新たな方向を志向すべく、1993年7月、その名も「日本バスケットボール振興会」と改め、今日に至っております。

換言しますと、日本バスケットボール界の主要各組織のOB有志が、バスケットボールにご理解あるファンの方々や企業各社とともに、組織や経歴等を超えた次元に立って、“日本のバスケット”の現状と将来について、共に語り共に考えつつ、知恵と経験を活かし、低迷からの脱出と世界路線への乗り入れを目指して協力している姿が、今日の振興会の実態と申せます。

- (2) 現在、振興会としては、役員会、親睦会の開催や機関誌の発行等を通じて、会員相互の交流を図るとともに、当面の助成事業として、ミニ、ママ、クラブ、中学生といった分野を対象とする普及援助活動を採用しておりますが、並行して、今後とも座談会、研究会等の開催を始め広報活動や財務活動の活発化を期して参ります。

上述のとおり、今日、日本のバスケットボール界に課せられている課題、期待されている活動は多々ありますが、関係者一同結束してこれらの改善解決に協力し、“世界に羽ばたく日本のバスケット”の実現を期して努力しなければならないと考えます。

私ども振興会は、いわばその潤滑油的な存在としての微力を捧げたいという気持から、ささやかな活動を続けておりますので、よろしくご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



女子アジア大会優勝の記

団長 安達 宣郎

12月のバンコックは一年で一番過しやすい季節であり、この時期にアジア大会が開催されることは、当然であったが、空港を出ると40度以上と感じる猛暑、ただ暑いだけでなく湿度が高く何もかもベトベトになってしまう程であり、事前に暑さは覚悟していたと云え想像以上であった。

一方、施設が出来ていない、高速道路も不十分であり経済状況の悪化等で大会開催は難しいのではないかと報道されていた。

JOCも事前調査を今までになく多く実施した。そのうち1回は、大会参加全競技団体の代表者が3泊4日で現地調査を行った。

その調査でバンコックアジア大会組織委員会と

- (1) 競技施設の仕上り具合と改善について
- (2) 選手村から会場への交通機関と所要時間について
- (3) エントリーの国、メンバーについて
- (4) 試合会場・練習会場について等確認を行い事前準備を十分に行った

この事前調査はバンコク組織委員会も、日本のアジア大会に臨む誠意と意気込みが感じられると大歓迎し、大会期間中何かと日本の要望を実現してくれていた。

バスケットボールの会場は地元の人達に「タイタニック」の愛称で親しまれているアリーナで船のタイタニック号に似た外観でその中に5000名収容のアリーナが3会場ある規模のものであった。空調も良く快適な施設であった。

チームは前回の広島大会で韓国に破れ惜しくも金メダルを逸した後、アトランタオリンピックと世界選手権を経験し、次のことを強化の中心とした

(1) 機動力バスケットボールの更なる追求

長身者が有利な競技性の中で脚力とシュート力を生かしたシステムを中心に長年強化して来た『機動力バスケットボール』をより追求して高得点試合をめざす。

ゴール下での攻防を極力避け、オフェンスでは相手が帰陣する前に攻め込む「速攻」と「ナンバープレー」により外側からの3ポイントシュートを中心に展開する。

ディフェンスではプレッシャーディフェンスを中心に展開する等で、ゲームでは、常に競り合いに打ち勝つ強さは勿論、常に高率のシュート力が選手に要求されることになるので体力の消耗が激しく、レギュラーメンバーと同等の実力を添えた控え選手の育成に努める。

(2) 積極的な海外遠征の実施

あらゆる条件下で戦い実力を発揮出来るための海外の強豪チームと試合する機会を多く

する。(時には海外遠征から帰国しそのまま成田空港で、荷物を入れ替えて海外に出る等過酷と思えるスケジュールを実施した)

環境の異なる海外での生活に慣れ、心身共にタフさを身につけ、試合では基準が違う審判にも順応する訓練を行う等であった。

代表メンバーは、全日本の中心メンバーである村上、萩原、加藤の3選手を次のシドニーオリンピック予選の為温存し、中堅・若手の選手を中心に編成した。

現地でのコンディショニングは

出発前のマスコミ報道では競技施設や選手村の完成の遅延不備が取り沙汰され心配したが、現地では完工済であった。また、食事も良く選手村の環境も快適で洗濯機の順番待ち以外は申し分なかった。

しかし、競技スケジュールに関しては出発直前、現地入り後に変更が相次ぎ、7日目に初戦があり2週間の滞在で僅か4試合のみであった。この間の練習場所と時間の確保も不十分であったがやり繰りできた。

チームコンディションは予選リーグの中国戦でエースガード川上が膝を負傷したこと、またその直後から数名が体調不良を訴えるなど万全ではなかったが、控え選手の活躍と本拠医師団やトレーナーの尽力により最小限の影響に食い止めることが出来た。

(3) 試合経過と戦評

1998/12/ 9. 17:15～ 予選リーグ第1戦

日本 2-0 キルギスタン (不戦勝)

キルギスタンはバンコク入りせずに不戦勝となった。

1998/12/11. 17:15～ 予選リーグ第2戦

日本 119 (71-25)
48-16 41 フィリピン

フィリピンは小型選手ばかりで一番大きいセンターが175cm。出だし日本はミスが連続5本と不調。しかし2分過ぎ大山がスティールから3P、2Pと連続ゴールで5-0とする。日本はオールコートマンツーマンディフェンスから速い攻めをこの試合の課題に挙げ積極的にディフェンスに取り組む。ファールが多くなったが10分には38-8と一方的にリードを奪う。8分にはフィリピンがゾーンディフェンスで反撃を試みるが問題にせず前半を71-25と試合を決定付けて折り返した。

後半に入っても勢いは止まらず、全員出場全員得点。6分には永田の速攻で100-38終盤、日本はフィリピンのラフプレーにも動揺せずしっかりしたプレーで終わってみれば119-41の大差で勝利した。

1998/12/13. 17:15～ 予選リーグ第3戦

日本 85 (41-47)
44-30 77 中国

出足から中国が高さを生かしたインサイドプレーで着実に得点。日本はシュートが決まらず我慢の時間帯が続いた。大山の3 Pやカットイン、永田の速攻など動きのあるプレーで応戦するが前半は41-47の6点差ビハインドで終了。日本はハーフタイムにディフェンスの徹底、また、スコアがハイペースなことを考慮し日本ペースと判断。走力で勝負することを指示する。

後半、開始直後は点の取り合い。日本は指令塔の川上が痛恨の負傷退場。日本がオフェンスのリズムを掴みかけたのは、大山の3 P、島田の速攻から12分には再び大山の3 Pで60-60の同点に追い付く。ここで中国がタイムアウト。しかしその後岡里の3 Pで更に3点リードを奪う。日本はリードした後も島田が3 P、浜口、永田らが落ち着いたプレーを続ける。中国は残り4分からディフェンスを変化させ激しく日本に迫るが及ばず、85-77でタイムアップ。

1998/12.16. 19:00～ 準決勝

日本 95 (⁵⁰⁻³⁷/₄₅₋₃₉) 76 中華台北

トスアップ後、台北の速攻で0-2とされるが、この試合日本がリードを許したのはこの一回のみ。その後は永田のジャンプシュート、浜口、慶山のゴール下などで14-6としたところで台北はタイムアウトを要求したが、日本はベテラン山田（か）のアシストや永田のカットインで23-10。7分に台北はゾーンディフェンスに変えるが岡里らの外からの攻めに加え、前半終了間際の浜口のバスケットカウントで50-37とリードで折り返した。

後半に入っても永田のカットイン、大山のバスケットカウントなどで着実に加点。13分には浜口が4ファールとなるが、慶山がその穴をしっかりと埋める。台北はディフェンスをオールコートに広げて反撃を試みるが追い付くまでには至らず95-76で勝利。負傷欠場した川上の穴を全員でカバーした試合であった。

1998/12.18. 15:30～ 決勝

日本 93 (⁴⁰⁻³⁶/₅₃₋₃₃) 69 中国

両チームともマンツーマンでスタート。浜口がカットインからボーナススローで3-0と先制。中国が3 Pを入れれば大山がボーナススローと日本は機動力で加点、中国は高さを活かしたプレーとミャオの1オン1で得点。互いに点の取合が続き40-36と4点リードで前半終了。

後半スタートメンバーを入替え島田をPGに起用、これが功を奏したかに思えたが、中国はインサイドプレーを中心に着実に得点し15分過ぎには45-46と逆転された。しかし日本はここから攻撃力を爆発させた。島田の3 P、浜口のカットインにゴール下、永田速攻、岡里の3 Pと日本は各人が個性を活かし得点ラッシュ。7分過ぎには72-60とした。この後、中国は1:3:1ゾーンで積極的なディフェンスを展開するが日本の勝利への意欲が上回り手を休めることなく完勝し、24年振りの金メダルを獲得した。

優勝 日本 2位 中国 3位 韓国

(4) 競技の総評と反省

今大会は国内公式戦の日程上僅かな準備期間しか確保できず、また選手選考も若手中堅が主体となったが、選手各人の母体チームでの日々の研鑽と一貫したナショナルチーム強化策の推進により24年振りの金メダルを獲得することが出来た。ライバルの中国は世代交代の最中であり、韓国は経済事情悪化の余波を受け強化体制が揺らぎつつあり、台北は中堅若手の伸悩みによる戦力不足等、日本にとって幸運な要素もあり決して胡坐をかくことは出来ない。しかし、前回広島大会から実に12人中8人の選手が入れ替わってのこの勝利が、大きな自信となり一層の精進に勤しむことになるであろう。また従来の強化策が現段階における最良の手段であることも実証された。来る5月の静岡アジア選手権で1枠のシドニー出場権の獲得を目指し、更なる強化活動に取り組みたい。

最後にとても印象的であったのは、試合会場で日本の応援をするタイ人が非常に多かったことである。特に決勝戦では中国の応援団が大挙して押し寄せ圧倒的な雰囲気であったが、試合が進むにつれてタイの人々が日本の大応援団に変わり大きな声援のもとにプレーすることができた。強化は若い選手空継続して行うことが重要であり中学生まで強化対象を拡げより多くの国際試合を体験させている。



表彰式で優勝の喜びを一杯に表わす選手一同

バスケットボール 僕の自叙伝

加藤 雅春



過去60年の僕とバスケットボールとの関わりをここに顧みる時、僕の身辺からバスケットが殆んど離れなかったことが解った。浅草の小学校で初めてバスケットを教えられたのが昭和11年、日本が初参加したベルリンオリンピックの頃であり、この時から僕の60年のバスケット人生が始まる。

昭和15年高師附中に入学、箏球部に入部。上級生の馬上英太郎、加藤祥行、小出浩氏などに鍛えられたが翌年の12月に第2次世界大戦が勃発し、中学3年の時には一切の公式戦や部活動も中止となった。しかしバスケットに魅せられ徐々に興味を持つようになったためか活動が中止となっても卒業するまでボールから手を離すことがなかった。

桐の葉のユニホームに憧れて東京高師に進学したのが昭和20年。その年の8月に世界大戦が終結しスポーツ活動が再開された。

翌21年春には中断された待望の関東6大学リーグが復活した。春秋共東京帝大が優勝したが今でも忘れられないのが秋の帝大との最終戦である。春の雪辱ならず1勝1敗後の優勝決定戦で、しかも1点差で惜敗した神田駿河台の明大体育館が思い浮ぶ。

高師、文理在学までの7年間で僕の現役時代であったが、この間常に第1線でプレイし活躍できたのは、小沢久夫部長をはじめ、井上一男、日高明、関口莊次などの諸先輩からバスケットを学び良き指導を受けたからである。

昭和28年、大学を終え社会人として最初に単身赴任したのが県立秋田北高校である。北高の指導の傍ら教員チームを結成し各種大会に出場し、昭和30年の第10回神奈川国体には東北代表として教員の部に出場し準決勝で島根教員に敗れた。昭和33年。

秋田北高は仙台で開催された夏のインターハイに出場し、大阪の東大谷に1回戦で敗れたが秋の第13回富山国体ではインターハイの覇者浦和一女を破って高校女子初の全国制覇を果たした。

恵まれた環境の中でバスケットに明け暮れ、バスケットオンリーの楽しい8年が過ぎたのも秋田県協会の多くの人達の暖かな支援があったからである。秋田はバスケットの心の故郷である。

昭和35年、秋田から創立4年目の市立習志野高校に転任し、僕の千葉県時代が始まる。男女バスケット部を創設し体育館が他クラブの練習で使用できないので先ず野外のコート作りから始まっ

た。そして「雌伏5年」、昭和39年、県代表として男子が静岡の第17回インターハイに初出場した。更に2年後の41年、秋田で開催された第19回大会で2回戦能代工に決勝で日大山形に共に1点差で勝ち、奇跡の全国優勝を成し遂げた。創立10周年の年で、野球部も甲子園で優勝し、6月に浅草から今の八千代に移住し千葉永住を決意した生涯終わることのできぬ記念すべき年でもあった。

昭和43年、日高理事長のあとを受けて8期16年県協会の運営に当たった。千葉国体が内定した頃で、48年の国体目ざして新日鉄バスケットの君津誘致や各種別の競技力向上に尽力した。自らも監督として千葉教員の強化に専念した。45年の岩手国体では一般男子の新日鉄と共に優勝し天皇杯を獲得した。この時の思い出も忘れられない。教員は49年の茨城国体51年の全国大会（八戸市）でも優勝した。

理事長と並行して昭和46年～51年、56年～61年の12年間、主に普及・国体・ジュニア担当委員として日本協会の理事を務めた。

そんな関係から日本協会主催の教員、ミニ、クラブ、ママさん等の全国大会の殆んどを千葉県で開催した。

国体担当としては、沖縄特別国体のため日体協派遣で再度沖縄に渡り、高校男子の指導に当たった。又、委員長として群馬、奈良、鳥取国体の運営を主宰した。

ジュニア関係では、アメリカ西海岸遠征、ソウルで開催された第8回アジアジュニア選手権大会に団長として参加した。

何しろ昭和45年の後半から50年代にかけては、習志野、県青少年課、佐倉と勤務先は変わったけれど、公職以外はひたすらバスケット一筋で精力的に東奔西走した時代であった。

以上簡略に僕のバスケットボールの足跡を顧みたが、再度入念に過去を振り返ると、まだ沢山の記述できなかったその折節の人間関係や喜怒哀楽のドラマが走馬灯のように尽きることなく浮んで来る。

友人、知人の殆んどはバスケットを通しての先輩、同輩、後輩であり、多くのバスケットの教え子達である。

僕の人生からバスケットを取ってしまったら、残るものは何も無い。今日在るのはバスケットのお陰であると痛感している。

バスケットボールに 魅せられて

早川 忠雄



自宅から500～600mの所にあった京都府立第三中学校には評判の体育館があった。戦災を逃れた京都といえども、昭和20年代にはバスケットボールが出来る十分な体育館がなく、公式試合は殆ど京三中で行われていた。大阪で戦災に合い、その年の秋に越した私は、三中の体育館で行われるバスケットボールの試合や練習をよく見に行った。

当時小学校5年生の私に、バスケットボールのルールなど解らなかったが、ドッジボールの倍も大きいボールを中心にスピードのある激しい攻防が繰り広げられるバスケットボールにいつしか魅せられて虜になってしまっていた。当時京三中には、眼鏡をかけた小柄な左利きの先生と動きが良くシュートのよく入る選手が目立っていた。ときどき練習試合に来ていた京都二商のチームには、細身で少々色黒だが際立ってハンサムな選手がいた。後日、その先生が小森正巳教諭で、シュートが小倉嘉三郎先輩で、ハンサムな人が中井貫一(佐田啓二)先輩であることが分かった。京三中は、後に山城高校になったので山城が母校の私は、慶応・NKkで大活躍された小倉先輩を心から尊敬している。早稲田在学中に拝借した白いトレーニングシャツにはK,SADAと刺繍がしてあったので、返すのが惜しくて失敬して大切に納っている。中井先輩がご存命ならバスケットボールの振興に、さぞかしご尽力頂けた事と思うと残念である。

早稲田大学では、出たり入ったりの部生活で部にも大変迷惑をかけた。4年の時休学して京都に帰ったが、さしずめする事がなく京都女子大のバスケットボール部をコーチした。毎日徹底して練習したらその年の全日本学生で決勝まで進出した。決勝で杉野短大に破れ、準優勝になった。

魅せられて虜になったバスケットボールの選手としての夢を諦め、今度は型を変えコーチとして踏み出す第一歩だったのかも知れない。

コーチの勉強は、ニチボー平野でさせてもらった。昭和31年から監督になられた尾崎正敏先輩が、33年には全日本で優勝された。当時コーチの渡部寿之先輩(早稲田大学ートヨタ通商)が、甲南大学の監督に就任されるので後任として手伝えと言われるままに36年～41年まで勉強させてもらった。ニチボー平野の練習は、コーチの私がここまでやるのと感じるほど徹底した練習だった。国体、全日本実業団、全日本総合選手権と連覇していたにも拘わらず、打倒韓国、アジア大会、世界選手

権を目指す尾崎監督の未だ見ぬ敵を想定しての練習内容は、高度で激しく厳しかった。世界選手権2位の実績は、決して一朝一夕に生まれたものではない。

昨今、実業団の名門チームも、ここに来ていろいろの事情を抱え悩みながらそれぞれの措置が取られている。これらの悩みはバスケットボール界だけの問題ではなく、アマチュアスポーツ全体に共通した問題ではないだろうか。一部では、バスケットボールのプロ化に賛成の声も聞こえて来るが、結構な入場料を払わせて「これがプロのプレーか」と観衆から失笑を買う結果になるより、企業に負担にならない型で帰属し、バスケットボールに魅せられ鍛練してきた選手が、ファンに感動を与える白熱したプレーを観せることが、バスケットボール界の振興、発展に繋がる道ではないかと痛感している。



家庭とバスケット

榊原 みどり



私がバスケットボールと出会ったのは中学1年の時、学校のクラブ説明会に友人に誘われるまま、このこと付いていったのが始まりだった。よくある話だが、友人は入部せず私はそのまま高校まで、いや、現在までもバスケットと手を切れずに、私の生涯スポーツとなった。

現在は、日本家庭婦人バスケットボール連盟でママさんバスケットの全国大会、各都道府県の連盟設立推進を含む普及活動の仕事をしている。これも中1で出会ったバスケットを飽きもせず続けていた賜物(?)かもしれない。

学生の頃はつらく、苦しい練習(楽しいこともあったが)ばかりに思えたが、素晴らしい仲間との出会いもあり、区民大会、都民大会に出場して試合後のビールを美味しく飲むために汗を流した。そんな楽しむバスケットに目覚めてからは学生の頃より一生懸命になり大学時代のコーチに“今頃頑張るな”と言われた事もあった。

そして神戸で行なわれた、第3回全国ママさんバスケットボール交歓大会に参加し、全国に同じようにバスケットを楽しんでいる仲間が沢山いることを知り驚くと共にとてもうれしく思えたことは忘れられない。

神戸の大会には3歳の長女と、1月に誕生したばかりの次女を連れて行ったため、夫が車で送ってくれたのだが、その時も家庭ぐるみで参加しているママさんをちらほらと見かけた。最近その数も増えてきたように思うが、家族旅行として楽しんで参加し、ママはコートで試合に汗を流し、パパはコートサイドで子供を追いかけ汗を流しているそんな光景が見受けられる。ママとしては、日頃のストレスの発散なのかもしれないし、パパとしては、子供達のふれあいを楽しんでいるのかもしれない。

4～5年前からは、スタッフとして参加しているので、全国各地の様々な事情、異なる環境の中で少しでも多くの人達がバスケットボールを生涯スポーツとして楽しみ、参加し各チーム間の親睦を深めて家庭婦人バスケットボールの輪が広がって行くことを願っている。

